

とちぎ訪問看護ステーション

くろばね・須賀川支所

大田原市黒羽向町142

施設アピール

旧車田医院跡に平成12年に開設しました。城下町にあるレトロな佇まいは、映画のロケにも使われました。

黒羽地区、湯津上地区の依頼は、お断りせず地域に根ざした訪問看護ステーションを目指しています。

サテライトとして、須賀川高齢者ほほえみセンター内にも開設し、地域の皆様が安心してご自宅で生活が送れるように、若手看護師からベテラン看護師まで、笑顔で訪問させて頂きます。



かわいらしいキャラクター達が、お出迎えをしてくれます。

施設の役割や特徴

公益社団法人栃木県看護協会立として県内7か所ある内の1つです。直接訪問に繋がらなくても医療に関する相談を受けることもあります。20年間この地域で培ってきた証がもしれません。

コロナ禍で在宅看護を望まれる患者様が増えたのは事実です。

退院前の家族指導が円滑に行えない分、特別指示書により私たちが集中的に支援させて頂いていただいています。またゴールデンウィークは終末期の方の看護が多くありました。家族の皆さんが関われるきっかけになっているのかもしれない。

1人の患者さんに対して、2か所の訪問看護で連携して介入したこともあります。曜日別に担当するなど、密に情報を共有して協働で支援しました。

連携している主な医療機関

那須赤十字病院、国際医療福祉大学病院、那須中央病院、磯医院、車田医院、江部医院、益子クリック

利用者保険割合
介護保険：7割
医療保険：3割

管理者 藤田洋美様
(看護師)



ケアマネジャーとの連携で

ちょっと気になったこと

ほとんどありませんが、ACP（アドバンスケアプランニング）についてケアマネジャーの力量に差があるなど感じる事が稀にあります。

ケアマネジメントを通して、関わっていく過程で利用者様の意向を確認し、尊重したことを多職種間で共有できるといいですね。

ACPについては、大田原市東部地域包括支援センターの看護師と一緒に、2年間地域のほほえみセンターで講話させて頂いていただきました。伝えることの大切さを学び、少しずつではありますが、住民の皆さんにも考えるきっかけ作りになったのではないのでしょうか。

ケアマネジャーに期待する点

看取り等は医療保険での訪問になります。介入しないケアマネジャーも稀にいます。しかしこれは制度上の問題です。「誰のための？患者様にとって何が必要なの？」アセスメントした結果、医療

いつも笑顔の藤田さん
困難な事例の対応でも、
いやな顔をせず、
冷静・沈着にこなします。

訪問を受けた本人はもとより、
家族からも、
信頼されています。

住み慣れた町で、この
家で最期まで安心して
生活ができます。

と介護が必ずマッチするのではないのでしょうか。
それをコーディネートすることを求められているのだと思います。多職種によるチームケアが必要ですね。

2025年問題以降は、「多死時代の到来」と言われています。独居高齢者と老々世帯の孤立、地域資源の不足などで自宅での看取りを困難にしているのも事実です。が、「在宅死」を望む人々への支援をするためにも、医療・介護・生活支援を地域で一体的に提供する地域包括ケアシステムを構築することが重要です。

家で過ごせる喜び、家族が傍らにいる安心感、何気ない友人の一言・生きていて良かったと思っていただけ支援者に皆さんと共になりたくらいと思っています。

※「多死時代」とは
団塊の世代の高齢化の後に、死亡数が増加し、人口減少が加速する状況を言います。

豆記者調べ



車田医院の面影をそのまま残されたステーション事務所玄関口です。
城下町のレトロな看板も粋なものですね。
「オサム朝」の映画撮影にも使われたとのこと、そのワンシーン見てみたいものですね。
(豆記者感想)

心に残った事例

※今回は訪問看護と一緒に支援した訪問介護事業所のヘルパーさんから伺いました

夫のピロリ菌検査に付き添った妻Aさんが、主治医の勧めで一緒に検査を行ったところ、すい臓癌が判明しステージ4と診断されました。抗がん剤治療を開始しましたが、効果は見られませんでした。余命2か月の宣告を受け、本人から「できる限り自宅で過ごしたい」と強い希望があり、訪問看護と訪問介護の利用がそれぞれ開始となりました。

当初は手引き歩行が可能で夫との会話を楽しんでいましたが、徐々にADLの低下と疼痛の増強がみられ、傾眠傾向が続くようになってきました。

介入して2週間後、体力の低下が顕著なため本人への介助負担を軽減を目的として、訪問看護と訪問介護がペアを組み、できるだけ短時間で全身清拭と排泄介助を行いました。

またAさんの友人も、週末には介護の手伝いを協力して下さり、その際鎮痛剤の座薬の挿入方法も指導しました。一時寛解し、夫や友人と会話をすることで、心穏やかに過ごすことができました。

その2日後に家族・友人に看取られて永眠されました。

くろばね訪問看護と連携し支援して感じたこと

大田原市社会福祉協議会
訪問介護事業所

・ターミナルケアでは、支援中の急変など不安があります。一緒に支援を行うことで、安心して介護を行うことができます。

・疼痛のある利用者の介護では、訪問看護師と一緒に支援を行うことにより、清拭・更衣・寝返り時に強い痛みへの訴えがあった時に、看護師が対応してくれるので、心強く感じます。

・訪問介護の支援は、ターミナルケアのケースが少ないこと、ケースの支援を行う期間が短時間なので、自信をもってケアすることができないことがあります。今回の同時間帯の支援を通して、励みにもなり、自信につながりました。

くろばね訪問看護師の

藤田さんから

ヘルパーと連携して、看取りの患者さんのケアをしたことは貴重であり、今後振り返りの事例にしたいと思っています。

参加してきました！

令和2年12月「日本在宅ホスピス協会全国大会 in 宇都宮」

管理者の藤田看護師が「地域緩和ケアにおける地域の訪問看護ステーションの役割」と題し、シンポジストとして発表されました。平成28年に栃木県看護協会へ緩和ケア認定看護師が入職したことをきっかけに、がん末期利用者の看護について相談し、具体的な助言のもと展開しました。

また専門性の高い看護師と協働する方法や、地域の先生方との連携方法、さらに緩和ケア専門医とチームを組み、がん末期利用者の在宅看取りを一例一例経験していくことで、がん末期の看護を学び実践した結果、年間30例前後の看取りをすることにしました。

専門性の高い看護師との看視連携により、地域の訪問看護師は成長し、「暮らしの中で逝くこと」の支援者としての自信につながりました。

